

第95号

令和7年3月14日

高三 金岡泰智

読書三昧

甲南中学・高校
図書館
図書委員会
芦屋市山手町
31番3号

甲南生大健闘！

二〇二四年七月二三日、関西学院中学部にて第四八回兵庫県私立学校生徒図書委員研修会が開催された。同研修会には十一校計六八名が集い、甲南からは四名の図書委員が参加した。
(高三 金岡泰智)

当日の流れ

開会式後には「図書館・図書委員プレゼンの部」が実施され、各校の代表者が自校の図書館を全力でアピールし合った。甲南は、図書館の紹介のほか、図書委員会の新たな取り組みについて紹介した。そして、なんと甲南図書委員会はこの部で優勝し、素晴らしい成果を残した。

委員会への影響

この交流会こそが、甲南で「ビブリオバトル」を開催するきっかけとなったものの一つだ。近年、若者たちの間で読書離れが深刻化している。そのような傾向を少しでも改善すべく、今まで図書委員



私立図書委員研修会

会は様々な企画を提案してきた。そんな中、この交流会を通して、図書委員会一同「ビブリオバトル」の魅力を再認識することができたのだ。このビブリオバトルに参加したことで、ただ本を読む機会を得られるだけでなく、「一人に伝える力」、「人前に立つ力」を養えることを体感した。まさに一石二鳥ならぬ一石三鳥である。それをぜひより多くの甲南生にも体験してほしいという思いの下、「甲南ビブリオバトル」を開催した。さらに、この交流会を通して、他校との繋がりもより一層強めることができた。



文化祭でビブリオバトル開催

令和六年九月二八日、二九日に甲南中学校高等学校の大教室でビブリオバトルを行った。予選での観戦者は七八人以上、決勝戦では八四人が来場された。イベントに携わった図書委員会の生徒は委員長金岡泰智、副委員長の豊浦脩生、栗山正暉、中野泰成、重田清貴、笠谷佳吾の六名である。

本番までの流れ

九月十一日水曜日の高校生集会で概要を発表。本来は高校生の各クラスから一名代表者を選出。計三〇人に中

学生の有志の人を加えて行う予定だったが、最終的には十六人(内三人は棄権)のバトルで行うこととなった。本格的に準備を始めたのは二六日のソフィア講演会後である。分



担は以下のようにした。
 豊浦はステージ正面のポスターの下書きを完成させた。そして二七日には音楽鑑賞終了後に簡単なリハーサルを行った。その後、栗山、金岡、豊浦、中野でポスターの完成、マイク申請、ポスター作成（生徒指導部への許可願、投票箱作成、進行作成）を行い、残すは当日の会場のセットのみとなった（一七時頃解散）。



文化祭当日、点呼は九時であったが、八時一五分に集合して豊浦、栗山、金岡で作業を行った。

本番 (二日目)

イベント開始は九時四〇分、終了は一〇時四〇分。バトラーには予め二五分に集合する旨を伝えた。進行は、金岡による挨拶、豊浦による概要・ルール説明を終えたのちバトラーを開始した。発表の順番は、他のイベントと被る恐れがある人を優先した。

会場の様子

バトラーが発表する前に司会者が本人の簡単な自己紹介文を読み上げ、一つ質問を投げかけた。これにより、観客の注意を引くことができ大変うまくいった。そのまま順調に進行することができ、時間内に収めることができた。
 最後に杉本先生に進行がスムーズに行ったことに関してほめていただくと共に改善点も指摘された。それは本の表示の仕方を工夫するようになるということであった。

本番 (一日目)

文化祭二日目。会場の大教室では他のイベントも開催されていたため直前の準備となった。豊浦と中野で道具を書庫から大教室の端まで運搬した。ポスターは予めスクリーンの裏に貼るまたは模造紙の下だけ貼って、裏向けるなどの工夫を行うことで素早く準備をすることができた。時間内にはバトラーが全員揃って開催することができた。



嬉しいことに、交流会で親睦を深めた雲雀丘学園と六甲学園の図書委員会の方々も訪れてくれた。



感想

高一 豊浦脩生

今回、私は初めて「ビブリオバトル」の運営に携わりました。私は去年図書委員会の研修会でビブリオバトルに参加した経験があったので、理想的なイベント像を具体的に思い描くことができました。しかし準備期間が短く、スケジュール管理や調整に苦労する場面もありましたが、多くの協力を得て、最終的には満足いくイベントにすることができました。

甲南ビブリオバトル優勝者のその後

**高三の小鍛治皓大さん
兵庫県大会に出場！**



甲南ビブリオバトルで、見事優勝に輝いた小鍛治皓大さん。文化祭での表彰式では、「本は心の栄養です」という名言を残された。彼はその後、全国高等学校ビブリオバトル兵庫県大会2024に進出。万城目学著の「八月の御所グラウンド」という本を持ち本に、三五校もの学校の代表者を相手に本の魅力を全力でプレゼンした。惜しくも全国大会出場の切符を得ることはできなかったが、灘高等学校や六甲学院高等学校などの名立たる強豪校に立ち向かう彼の勇姿は永遠に語り継がれるべきであろう。
 (高三 金岡泰智)

も運営の中で見えてきた課題や反省点もあり、それらを今後の改善に活かしていきたいと思えます。
 * * *
 高一 中野泰成
 僕は今回初めてビブリオバトル・その運営に携わりましたが、参加者の熱意があったおかげで甲南

ビブリオバトルは大成を収めることができました。そして準備段階から当日のサポートまで、運営側としての責任を感じつつ、参加者が本の魅力を語り合う様子に触れる事ができて読書の楽しさを広める貴重な経験になったと思います。



『姑獲鳥の夏』

京極夏彦 講談社文庫 (y/きよ/1)

by 高一 菱村一陽

人は何故、怪異を創り恐れるのだろうか。私は筆者の語る、人のあり方に魅入られ、この恐怖の虜になった。この話は最後まで人を中心に語られている純粋ミステリーである。まとわりつく怪異が見せるホラーが香辛料の様に人々を惹きつけ、事件に巻き込まれたものたちが迷走し、長いページで沢山の人の視点から語れる未知の出来事がこの作品の見せる世界だ。知らぬ間に読者である我々もこの世界の怪異に共に憑かれてしまう恐怖、主人公である拝み屋から憑き物を払い落とされる時の爽快感は読んで見ぬことには何とも言い難い。この話は小説家である関口巽が眩暈のする夏に産婦人科病院で起こる事件に巻き込まれる話である。序盤の未知なる事件の概要、中盤での共に出口の解らぬ事件で迷走する謎、登場する人々の見え出す人格、終盤の憑き物が払い落とされる安堵と解決の余韻、その全てが完成されている。結論だけではなく途中で語られる物事を經由されることで最後に全て解決することができるのである。人々の創り上げた怪異を、事件を、記憶を解き、覗き、恐怖し、憑き物を落とされたいなら是非読んでみては如何だろうか。



『巖島』

武内涼 新潮社 (y/たけ)

by 高一 豊浦脩生

「巖島の戦い」を題材にしたこの小説は、1555年に毛利就が兵力4千で2万8千の陶晴軍を壊滅させた壮絶な戦いを、陶軍の重臣・弘中隆兼の視点から描いています。一般にはあまり知られていない弘中隆兼ですが、その内面や葛藤が丁寧に描かれ、物語に深みを与えています。また、勇猛な戦略家としての毛利元就の一面も印象的で、戦国時代の緊張感や人間ドラマがリアルに伝わってきます。舞台となる広島は関西人にとって馴染みがあるので、理解しやすい所もあるでしょう。内容が少し玄人向けに感じますが、だからこそ歴史ファンや戦略好きにはたまらない1冊です。ぜひ読んでみてはいかがでしょうか。



図 書 委 員 で
本 を 選 ん で き ま し た

2024年8月29日、ジュンク堂(三宮店)にて図書委員店頭選書を行いました。今年は3名の図書委員が参加し、計33冊を選書しました。不朽の名作から話題の新作、幅広いジャンルの本を選んできました。33冊は全て生徒の皆さんに読んでいただきたいものです。ぜひ図書館までお越しください。



『パリのすてきなおじさん』

金井真紀、広岡裕児 柏書房 (302/35/カ)

by 高三 金岡泰智

あらゆる境遇を持ちながら、パリで優雅に暮らすおじさんたち。そんな彼らの人生観は、現代の私たちの悩みを軽く吹き飛ばしてくれる。くすっと笑えるような彼らの趣味や私生活も組み込まれた最高の1冊。ぜひあなたも彼らの生活を覗いてみてはいかがでしょうか。



『成瀬は天下を取りに行く』

武内涼 新潮社 (y/たけ)

by 高一 寺川倭玄

高校生の成瀬は「天下を取る!」という大きな夢を掲げているけど、その「天下」が何なのかは自分でもよく分かっていない。それでも仲間を巻き込みながら、次々と奇抜な計画を実行し、毎日がドタバタの連続!最初は笑って見ていられるけど、次第に行動がエスカレートし、成瀬は周りとの衝突や自分の夢に悩むようになる。そして、最後に成瀬が見つけた天下とは一体何なのか? ユーモアたっぷり、読んで後に元気をもらえる青春ストーリーです。



漢校とのダイアログ合戦

令和六年度六月十六日に甲南生八名、灘校生十名で甲南中高図書館にて読書会を行った。読書会では課題本を事前に読み、本についての感想を話したり、それぞれの場面背景を考察したり、登場人物の心情を考察したりなどをする。今年の課題本は、中島敦の『山月記』である。

感想

高三 柴田武則
大変有意義な時間

であった。交流を以て互いの価値観・世界観の違いを認識させられ、またその違いを興味深く思っていたと共に、本校の特性



を十分理解することができた。本の主人公「李徴」に対し、灘校生は己を重ねるのではないかと、という仮説を抱きながら参加したが、果然そうであり、さすがである、と思った。

高三 笠谷圭吾

灘校生から出される意見は僕じゃ思いつかない視点からのものばかりで聞いて面白い。

高三 山下哲平

今までは課題本についての意見交換が主であったが、今回はそれに加え、ダイアログという新たな形で課題本に触れる試みがあった。また、「友達にするなら李徴か袁徴か」というお題では、甲南生は袁徴を選ぶ人が多く、灘校生は李徴を選ぶ人が多かった。それぞれの校風が反映されていた。最後の意見交換で

は、著者である中島敦が、虎となり自我を失う李徴の姿と、パラオで病に倒れ、死が近づく自身の境遇を重ねていたことが印象的だった。李徴が虎になる前に家族を置いてでも詩人として生きた証を残そうとしたように、中島敦もまた、病による死が迫る中で、小説を書くことで自身の生きた証を残そうとしたのではないかと。それこそが、彼が最も伝えたかったことだと感じた。作者の背景と作品との関係性についても考察しながら本を読んでいた。

高一 木上友斗

今回僕は初めて灘甲戦の読書会に参加しました。今回参加して思った事は、参加者全員がそれぞれ独自の意見をしっかりと述べていると言った事です。本の文章一つをとっても、捉え方は人それぞれで、各々が自分なりの解

高一 豊浦脩生

私は今回三度目の灘甲戦の参加となりました。なので面識がある人も多く、肩の力を抜いて参加できました。おそらく今回初のダイアログ対決も行い、今までになかった斬新な交流会になったと思います。課題本は短編作品と

積を明確な理由をもっていました。また、灘の生徒さんとはとてもしっかり本を読み込んでいた様子だったので、すごいなと思いました。僕は今回の読書会では読み込みがまだまだ足りなかったのですが、他の参加者さんのような自分なりの解釈や、それを説明できるだけの確固たる理由をもっていなかったもので、次回の読書会で、絶対にそんな事が起きないようにしようと思いました。その他、普段は話さない灘校の生徒さんとの交流もできて、とても楽しかったです。

いうこともあり、一つの場面をより深く考察できて楽しかったです。各自、本だけではなく、お互いの学校についてなどの会話を楽しみ、より親睦を深めることができ、有意義なものになりました。ライバルとしてスポーツで競い合うだけでなく、こういった形での交流も良いものだと思えました。来年も楽しみます。



『李徴・山月記』

中島敦 KADOKAWA

(y/なか)

